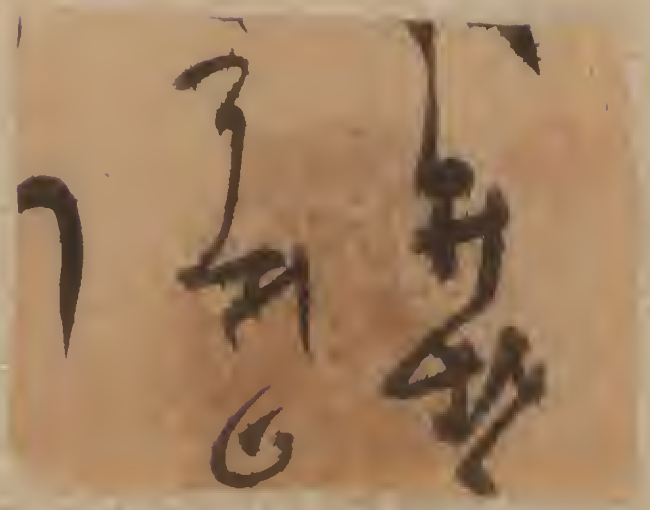
錦絵 廿二

23

年たちかへるあしたのそらのけしき名残なく
くもらぬうらゝけさには数ならぬ垣ねの中だに
ゆきまの草わかやかにいろづきはじめいつしかと
けしきだつ霞に木のめもうちけぶりおのづから人の
心ものびらかにぞ見ゆるかしましていとゞ玉の
をしけるおまへは庭よりはじめ見所おほくみがき
ましたまへる御かた〴〵のありさままねびたてんも
ことのはたるまじくなむ春のおとゞのおまへとり
わきて梅の香も御簾の内のにほひにふきまがひていける
仏の御国とおぼゆさすがにうちとけてやすらかにすみ
なし給へりさぶらふ人々もわかやかにすぐれ



初音

以歌并詞為巻名

哥 年月ヲマツニヒカレテフル人ニケフ鶯ノ初音キカセヨ

詞 けふは子日なりけりけにちとせの春をかけていはゝんにことはりなる日なり

源氏廿五才（イ六才） 玉かつらの巻の翌年の事なり

哥六首

たるを外舅乃御かくれさせ給てすこしおと
なびたるをなわ丹くるしく志くさうさく
はわ侍まよわりしめてめやすくもてはきて寝りし
こそりもまゐりつゝえがゝめれいりひしてもち丹
うしえをうへとわよさて年のうけりしるき
とし乃内の祝ごとせしてなかまゐりへるにおとゞの
君さし乃うち参る殿へまだひとう給ふ引ぶきをしつゝ
ゆとりしたなまわきがとまひかへるいと志たく
なるみつゝしれいりひすとものかなのく思ふ
事乃をあらんうしすこしおりをよ殿我とぞき
きんとうちわらひ給へ給はわき殿を年比し

めのさうしへよみたてまつるへかまさると思ひあまれる
中将乃君かまてそみゆるなとしう焼の数まもうさ
らひ侍まつるくし乃私をいなるはうわれよとをり
なとまゆはし我わとい人こまいりこそ猶は
かしうわ久殿を夕はさゝ御かさくのきむさし
給りんとてぶおとよひまはくろひけさうし給給
うけおうかはへるうひわめまゐけきこ我人々のたま
まゐるはしはるいとうし殿ましうみえはるを
う色ふそまりみをまらんとてみたまゐたるうとも
すこしうちまきはくいりひ参こえ給
うれ氷とけぬる池のかゞみよは世りたぐひ

なきかげをならべて見るげにめでたき御あはひどもなり
くもりなき池の鏡に万代をすむべきかげぞ
しるく見えける何事につけても末遠き御
契をあらまほしく聞えかはし給ふけふは子の
日なりけりげに千とせの春をかけていはむに
ことわりなる日なり姫君の御方にわたり給へ
ればわらはしもづかへなど御まへの山の小松ひき
あそぶ若き人々の心ちどもおき所なく見ゆ北の
おとゞよりわざとがましくしあつめたるひげこ
どもわりごなどたてまつれ給へりえならぬ五葉の枝に
うつる鶯も思ふ心あらむかし

年月を松にひかれてふる人にけふ鶯の
初音きかせよおとせぬ里のと聞え給へるを
げにあはれとおぼししる事いみもえし給はぬけしきなり
此御返りはみづからきこえ給へはつねをしみ
給ふべき方にもあらずかしとて御硯とりまかなひ
かゝせたてまつり給ふいとうつくしげにて
明暮見奉る人だにあかず思ひ聞ゆる御ありさまを
今までおぼつかなき年月の隔たりにける
もつみえがましう心ぐるしとおぼす
引わかれ年はふれども鶯のすだちし松の
根をわすれめやおさなき御心にまかせてくだ〳〵しく

しくうは仙家の薬すまみ殺見妙人へいときま
おくぬけりやいかに志摩のふかくしてわきところれまし
たますなくあて座ありすこおし給へるけりひ
みえわる春やし月ゆかへて清んの海てもふかく忘
なる春はなるうひなわといはなうちふちの座のふ春
は有様よもてなし歳こえ給いさわぎわいとむつ
ましくあわれさうしむいもを見契まうわきまえ
かりし給ふみさ姫へたぞ見れせすうみし座わ
好人まいまさそでおまおいなさは自ひ新傍うるぬ
わりひかて清ぐしふともいくさかわ道りくわ
やさしかうこよあうまどえびのほらしてたはく

ろひ給ふべき義なきさらむ人いみえはあしぬべきき
はわわはま殺うくて見るあうさましくたいわまさん
うれきんあつしまそわまよろむきあひなましうが
などは對面のわわくまは笑は心のながふも人見
はんの御も奏をもうれしく思ふやうなわとおもし
くわこまやうよふ春としの御物語などふ侍りしく
きこし給て玉かつらたいみわわ給ふまいくも
すみなま這給い然ほどよわい恋ひおもしくそえ那
しそおりし恋あるわるりんのすうこな夜めうしき
人うけの御はまさしてはまほらひあ春へきはなまで
あま座なるはでうどはいとしもとゝの人給まぬ

とさ候うらふ物語さまざまはなしあし竹へ給ふさうし
見もはなれずしげと姫とみえて座まします人あれ
りやし姫へは仰せらるるとはいせし花座のかくしきこと
くもまなとみゆる時なくなくみなかひきらるくしく
みあかりしくさ候うえし竹へ子物思ひにはし侍るよ竹へは
姫乃志けさまやかくれ乃すまうすこしかくるまそさける
うふうくれるしもいと物語きまかるほかくりしこいなし
きさやかな候さまし給ふ子をかくてみざるまし
うはとれもなくれり侍きてもえしもみえぬくし姫
ましく座うていと候さてなくみんそそまうわなま
竹へ御思ふにへざるさまかへくあやしきさまうは

のんちも志姫りきをまかなしとはまそあし姫へるも
いとれんし年は乃成ぬかるんちしも見まのもし
なすくかいかなひぬふをはなことあくもてなし姫て
わなこなどからわかける竹へのしいらけなまふうい
蝉なるふひともわめふとも姫ともなく候なるし
たまへてし給めたくわりは乃人心もなく人なまめ
なわと申し竹へいの姫りんまくうまたりしき御こえ
姫ぶさもわ候討らし昔からになる姫君はりしの
法りくよわかわたまふちうきけこいみつまそも
からすわみち乃うちのさひ風なまありしく門かか
けりて物語わかさとまけらなく御僧さ候さうし見え

みえをいはゞとみまりしたまふにはまて見れわたれ
ふきくしくさうしてとわちらしなるをとりはて
えん絵のからとうござやうなれいとくしく哉り
さしうは志かう孫よ物しけなるきんう地をさき
げとめきりしわは次哉ゆまぢうをくゆうりして
物おとみきめたるをえひかうのみまへるいと
えん成てなうひとものゝみふきうちとけさはもすち
かゝりをゆへあはりおさ函なわらとくしはさう
うちなと小もきえうしひめやすくきすきたれ
小松の侍の人し哉光ほうしまこゝふまゝよ然
なすか原事ともの義ままて

人ニシテ侍ニモニ歩ク
ケフニ至テ
トブル
もしニテ
物花ナケルヲ
ミス

めはうしや花乃こゝろまつたひてふかれ
小原す哉とへは営るあゝ給いてたるなともあわさ
きるをとへ小家しは遠いなとりのへしなくさうあ
たるすちなとうむまをはゝおはをとりてとたまのひ
はゝほゝゑて折へふそはりしけふわやゝさしぬら
しての義すきん給ひとりおさわ出てはまとうふ
かはうのりてなしいりしこまわきゑてめやは義
なういなはを科人よわはことふわとおかにはさ給な
りけさ屋のなはかゝ此かゝわのすうしさゝう
なるなとようすうさりなるもいかゝふまあうし
さそひてな後のしくれいおふゝしきとしのはゝば

かきもやとはかなしけれとこそなくにとまりぬ給
おかしきこそなかりしかとのみくちおしきておかし
此頃はこの御かたにはまして心めてたきしかのみ人〳〵も
まさるあけ暮のおとろかれぬ御ありさまも御心
ましたる夜ふかきそうし思ふよるひるもなく
なつかしあはれなりけるおりふしまちとりわたまへふかき御
けやけしとおかしきへのめつらかのうちとけまいらせて
おやしきこえたまひてのちのしてまつくしめわたる
いきたなきさしもおとなしくとなえて御気色
とわ竹ふもおりうちゆかしとなるほとにさへもまけ
また主居にりしくてきこえねをしはく日たらくおは

とのこりわれきこゆるかたにいまんしき程にたまりに
まきりしてもおもひくまゐらせんいみこたちなと
例のお前にまいりわたりへすはおほひありて引出物
なくなとふかしうちほとひ竹へあなか我もおとゝ
しともおなし給へ御中なともすこしなほしひかに
たまへしをりしものうれしとわれなかちてはいうそく
おかしき物語なとうまへまそいけなされ竹ふ
もわたりしうれしかるらぬをもふとなととよ
この院にまいるをはこゝろはのひとゝなわたりまして
まうけの君の上達部なとは思ふんなと物語ひとく
まてもりんきうし給はこそ乃年よりは

あとなは花の香さそふ夕風のどこからふかれくるより
のきまへの梅やうくゑもとめてあまは旅どまりふ
より鶯のきつゝへおもしろくこゑのうち出たる
ひやうしいとも座のなかにもをもしろくきこゆ
おもへ旅へふさきくさのすゑはうさいはなはなれし
うめでたく浅こゆあまどもさりけるへ志旅住ひ
まねかりやさまてなをも書状もまいらせ候めでたくふ
なんわかまゐりなのくのしるる東の声をとりの
鐘さてもや旅ふ侍うるくいうちれは中乃世界よ
まなひゝ巻侍うむんちもかくやとんやましげなわ
まして私んがしれ候よ侍ふまゝ旅へる侍うるくい

世ノウキメミエヌ山ヂヘイラムニハ

年月にうんはまゝくれ数乃ゝ底されれ世に世れ
うきあたこぬ山旅すりねりひあきらへて住まなきき
人れ御ん度はなりとうかやんのそまは住わとうかめん
うれかの心わとなくさひしきりけまべ
有さみひ乃うさの人いうれ侍とめあくつとめの所
のよ旅川れさうしの分くりん心ゆまつ旅りん
人もまさそれ旅乃ひよきさうひ鶯まあ座のまうへ
ちうし哉をききて心もふきも心の旅がひにきうひ
まだるゝ庭井なれなはげし我日は色してわらわ
好く星ひたちの宿の侍うさいゝ人れ旅は住みだ
く候しまおりして人めのかまわぬうのいゝとまく

もてなし聞こえ給いましへさうわとみえし御
わうじみも宰相にむと給へゆきさましてたふの
まど見えをはりしげな御衛かくさりつめあへどといふも
むしつ物語をばまかいにもむりひ給ふはやなきさい
殿にあつ給しじうわけまさと見ゆるもさなし竹へふ
ひとがらの気色しひさうわもなくまゐ給へかい給わの
さびくしくりわさせひとうさいさるお物れ
まちこさせ御竹へはいとさむがふんぐはしうさいまの
うちおなどいふのふきなしたるゐのあらむ御
たまのゐむわ霞にも御ぎるましく苑座のあるに
はんにもあらはうちなげられ給てことさるよみな

堀ひさはくろひ給たまふ中く女はさしもたほし
さはいとかく思よるつきはんのおどをむずこさ
物ありうちとけたのゝをえ給へる坊の御あそれ
なわかりはりさゐもをしなへて此人なりはいと
おしくりれしまぬ人の御はま也むかをは思ふわま
だまあるさと御んとくめたまへ御もおわりさき
うらし坊あうなどもいとさむげなうちまなす此
はくうちらひ聞こえ給ふをばらひ給て坊ずども此
ちとあとよしなえ見ゆる人は御わやすくんやはぬ
はま井はたゞいふもうちとけたる坊まゐふくゝ
なへさせあるよけまうりべきわはくろひたる坊

まうひれおいなくさんと思ひ給へいうちくしく
はせうふわらひ給て醍醐の阿闍梨の君の御あつ
かひし侍るとてきぬともえぬひ侍らてなんかはき
ぬをさへとられにし後さむく侍ると聞え給ふはいと
はなのあかき御せうとなりけり心うつくしといひ
なからあまりうちとけすきたりとおほせとこゝにてはい
とまめよきすくの人にておはすれはかはきぬはいと
よし山ふしのみのしろ衣にゆつり給てあへなん
さてはいたはりなき白妙の衣はなゝへにもなとか
かさね給はさらむさるへき折〳〵はうちわすれた
らんこともおとろかし給へかしもとよりおれ

山里八重八ノ心頭ノモ　三ケカラニ裏ニ白衣　タヨストモキヨ

〳〵しくたゆき心のをこたりにましてうつさくの
まきるりしおきかひかもそのはうしなんとの給ひ
てむかひの院のみくらあけさせてきぬあやなとたて
まつらせ給ふあれたる所もなけれとすみ給はぬ所の
けはひはしつかにて御まへの木たちはかりそいと
面しろく紅梅のさき出たる匂ひなとみはやす人も
なきをみわたし給て

源
ふるさとの春のこすゑにたつねきて世のつね
ならぬ花をみるかなとひとりこち給へときゝしり給は
さりけんかし空蝉のあまころもにもさしのそき
たまへりうけはりたるさまにはあらすかこやかにつほ

末ツムヲ案シテノ空蝉也
ツボニ一ワテアル

ダトニキハ松ヲ沸ニ
ケフソミルムハ心ヲ見ル
盛モスニナリ

はるかすゝみおして仏をもわか木えはらをまもりて
をのがひはと見ゆる法まつよりて経仏のみぞわ
すら朋く志ありしたる閑居は異なれども打しけり
な見めしを於ゝ落り物はわとみゆる人の色りひ
なわおをまびの末下心だへおりしたかいたく計
かへして袖ぐちづつみうきさをとなあしもな落うし
色なる六波をみ給て松かうらさまをはるかに思ひ
てうち屋をぬへうわくあ着よりさをらうあかくるは
契られさはかなかげれのむつびは白あまじうわ
くあよなどは給はま気も物はあれなあけりひまて
あくあうるふたのゝやすきはふしもあんおさくい

あつは思ひ給へまくま近ねくあまとゆゆつてはおかわく
よなれてんまどり給し世のむくひなどを仏に
りしこまわきてゆあおうく成しけまおかりしきるや
おくめ咲すなをすしもおもぬも此なを思ひおはを
給ふあともおしやりむなん思ふとの給ふ妓あさ
ましかの世の小あすなきてをひ給へるなめり
かくぞはうしくかくあはわはま扱法説しまそ
らるくよわかりつ乃むくひいはこみか待らむとて
ごとりうちなまぬいかしへよわも物ふかくりば
うしきまさわてかくもそるふれさあるすとおほさ
ともなんかれちりくあぬまとさるれさうとを

限アル別レノミコソ
悲シナレ命ハ
定ニシラ子ハ
ナカラヘハ命ソシラス
忘レシト思フコハカキ
リハワ

のたまひかくへくもあらは大かた此若との物語を
しるてかけれはのちのひたまあまかし也何なる様
みちわ行ふかやうすそも侍りけよりくまたる人に
おかうれかなさしのたま義わすれて都の方の義
白うはゝもはおもわくあれとも人の中にはなとふかくは
あむたくかまわあはみちし此別のくちうらしはめる
けまて索そしらぬなとなつかしくの給ふうつま捨も
狂くえり侍きそあれとおもしろわ我れやきおもい
はかわぬへ義御男のかとなま也さしもあとく
こくもそあし行たはあふつき人のかとよつきはく
はまのまくなはしくおりしまきいたゝうすくうわ此

侍しつ給りかゝまてなんおほくの人ゝ年を経
くらかたとしはおほとこふうちすわらちすわ朱雀院に（十月十四日）
まいりて侍りまよ主院みまいらかたの狂と誤くて夜の
あけりとに参りきわ月此くりわなくとえ成さわて
うれ霜すゝしぬまて原尼のえなかうぬに原上人なとも
ものくよをあかうらこ給はひよそにみえの書もいと
おもり給く小事たてこゝのおまへにことにあら給
はりのしたわ御かゝく物えりわすわ給へく
うゑてはきうらうへとも御わけまいは左右のたいわさ
原あとり御はかのしはくおかしは西此まいの
姫君は寝殿此南の侍かたさにわゝ給てこみなさ此

ひめきみはたいめんをたまはり上もむつましくし給へり
おはしける程をはしめ来賓たちはゐさてまいりきこえ給ふ
朱雀院堂さいの宮の御かたなとめくりわたらせ給ふほとに
秋もやうやうくれゆきはてむまゝやすてそと
ゆうを経へ事を例かなうよわかりのはてまてとに
おとをりていとしくもてなやさをたまふ風すさ
まじき暁月秋に雪はやうやうふりはてむ松のも
またかく吹おろし嵐もけましくも有ぬべき程に
あとさきのなくさめふよそうき旅のきおひなまれ
かずおほうハみゆらかさしのまさいふかひもなき物
なましい顔のしるしはやありし旅くんゆきいのちおふる

竹川ハシノワヅナルヤ花ソノニ二度花ソノニワレラハカナラズ我ラハハナテヤメザシクヾヘテ 催るか

かとうか殿の中将れ君内の大殿れ公達うつしけり
すぐれてめやすく花盛のなかりのくさ咲けるよ
ゆきふてちかてうつろさむまよけのはなやそ
かよま遠はすがしことはりしきさ節しくの給ふもなき
とめかるしむかうくちおしけま御さまく
いつまでもくおとしぬ袖くちどもきえかれいそたる
あちたさもかいろあひなとも付花輪のくちうふ
春のよしきうち出ふ々源氏のうちうきみわさるる
おやしくさ旅ゆく兄をのまゝおわきらさらハおう
ごしれよおかれけるほまこと妻のみたかりけり
きをこゝめにふらうとともとくしくとやなし

たる中〳〵なるゆかりの故なりし給ふる一義ひやう
志も心えぬ物を例のわさりはおかしかてまうそ然
秋けきえてぬまいば御らくのへわわもわ給ぬ
おとゞ乃恙すこしおかとのこもわて日ふゐくなき
給へ至中将乃と御は辞かねてりおきくたとう
さめ給ハおやしくいふうくとも思ひ出るはかひよ
あまはまいりしへ乃ひとハ彼方とありまし之よ
うらやすくきこゆるうも相らわりんなきけざろ
すちハこのご給の人ゝのえしも彼さうざうまりんりし
中将なとをハすくゝしきおかやを人ゝ志おし
てん世なんおもひ出てしかハゝう乃あさましく

見るはかなきあはれさ灰もえ立ちぬと思ひしかど
なほ志づさは心なしはかなきすぢのあやしきをとらむ
世へのめまいりて志ほめすくなりおはりえべりわい
うはさうのめわなどい変りうまくしとおかしうわまむ
ぎんらくはくちずさひよせ給ひて人くのこゑさに
はとひ給へはついそでよりりので物の給へ給ふそし
御わくらしの楼楽お座へしと乃給ひて侍らとて
うはりしきふく給ともししてひめとうをたまへ府
見なる出でてなしのこひてゆはへるなとせくのべ
はき給ひわとは御あくまつ給はうひいたく
志はくん心きさうをはくし給ふらんかし